
東方娛樂記

からくり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方娯楽記

【Nコード】

N6837Y

【作者名】

からくり

【あらすじ】

幻想郷に幻想入りしてしまった嘘つきの少年が、変てこな能力手にしてフラグ建てまくりながら生きていくお話。外で死を望んだ少年は幻想郷でどのように生きていくのか。嘘が真に変わり、真が嘘に変わる。舌先三寸で俺は生きていく。

生活下準備？（前書き）

隙間妖怪&脇巫女&才り主

生活下準備？

「……ああ、すみません、説明長すぎてほとんど聞いてませんでした」

「……三時間もの間説明をしていた私の苦勞はどうなるのかしら？」

「得意の隙間にも埋めてみればいいんじゃないですかね？」

軽口を叩きながら、目の前に置かれたマグカップを取り中に入っていたお茶を啜る。渋くて美味かった。いやお茶の味なんて知らないけど。知ってるのは結構久しぶりのお茶を飲んだっただけだけど。

「……ああもう、調子が狂うわ」

「じゃあ簡潔に俺がどうなったか教えてください」

「貴方は死を望んだ。だから私がここに連れてきた。ここは幻想郷。人と化け物が共存している。貴方は人としてここに来た。今貴方は博霊神社に居るっ！ どうよ！ 簡潔でしょ！ ちなみに私は幻想郷の管理人なのよ！」

「はい最後以外は簡潔でしたね。ありがとうございます」

悔しそうに顔を歪める化け物……とは思えないほど可愛いというより魅力的な女性。一時間前までは妖艶に微笑んでいたのに、どうしてこんなにも変わってしまったのか。俺には理解出来ない！

「貴方のせいよ！」 「心読むな」

とはいえ、そうか。確かに俺は死にたかったけれど、まさか生かされるとは思っていなかった。正直言っただ迷惑極まりない。と思っただけれど、話を聞く限りだここは俺みたいな捻くれ者の天邪鬼でも普通に住める場所らしい。

しかし実際にここで生活するかは知らないけど。

「話聞いてたんじゃないの!」「心を読むな! 次読んだら二度と喋らねえからな!」

おつと声が荒んだ。人をからかう時には決して素を見せちゃ駄目っていうのは教わったはずなんだけどなあ。何て思っただら睨まれた。成る程これも中々ありか。って何危ない思考してんだよ俺。

「……貴方本当に十六歳?」

「ところで貴方は何さ」「言いきったら死にそうな気がした。というより殺されそうな気がした。やはり女性に歳など聞くべきではないか。」

いや、でも確かこの場所が出来たのが 逆算してみた。驚いた。思わず仰け反った。隙間妖怪でありこの管理人でもある目の前の紫さんでさえ、その反応に溜息を吐いていた。はっはっは、笑えちやう。

……笑った瞬間に殺気飛ばされるってどうゆう事だよ。誰か説明しておくれよ。なあ殺気飛ばした張本人である紫さんよ、答えておくれよ。

「そうね、人をおちよくりすぎだから」

「はい読んだね今心読んだね！ ごめんなさいって言うまで喋らねえかんね！」

「……………」
「ごめんなさい」「その表情グツジョブです！」「うううううううう！」

何かもの凄く悔しそうな表情で唸っているのは無視する。金髪美女があそこまで可愛い表情見せてくれたんだからラッキーラッキー。例え嫌われようとも俺はめげない事にする。

「……………」別に嫌っちゃいないんだけどね」「うーん、今の独り言見逃してやる」

おつと顔赤くなった。これはシャッターチャンス、だが残念カメラがない！ 畜生俺の馬鹿野郎。……………」しかし中々、こんな管理人が居る位の所なんだから、俺が居ても遜色は無いだらう。

永住しちまうかな。とか甘い事を考えてみる。だが実際甘くも無い。能力も無いし力も無いけれど 人里とか言うところなら俺は暮らしていけるだらう。

だけどそれはつまらない。そんな安全など望んじやいない。俺にとつて、安全とは逃げるって事と同じだ。それは嫌だ。それは死んだ方がマシ。安全とかならあの世界に居ても変わらないんだ。それなら死ぬ可能性があろうとも、危険を望みたい。

危ない思考だと、自分でも分かっている。紫さんは何も言わない何も言わないで、静かに茶を啜った。空気が読めるんだらう。成る程、気を抜いたら惚れちゃいそうだ。いやもう惚れてる。

「話は終わった？」

襖の開く音と同時に聞こえた背後からの声に、思わず振り向きそうになる。確か声の主はこの巫女である博霊霊夢さんだったはずだ。俺の記憶力に間違いがなければ、そのはず。

「ええ、大分纏まったわよ」

「そう、なら良かった」

どこが纏まったのか……いや一応纏めてくれたか。俺が理解していないという選択肢はないようで、どうやら随分最初に言われた気がする『理解しないと駄目だからね』という言葉は本当だったらしい。危うく駄目になる所だった。

再びマグカップを手に取り、茶を啜った。和室にあった畳の香りと共に茶の香りが漂ってくる。いや茶の事なんてしらないけどね。

「お茶菓子あるけど食べる？」

「貰うわ」「遠慮しておきます」

「……紫、ちょっと遠慮っていう言葉を覚えた方良いわよ？」

「っ、うるさいわね！ いいじゃない別に！」

そんな紫さんの口調に、思わず驚いた顔を見せる霊夢さんが居た。おーい、紫さんや、口調が完全に狂ってますよ。あの妖艶な感じの紫さんはどこに行ったんだい。

思った瞬間、紫さんは開いた扇子を口元に持っていった。

「……相当崩されたようね、紫」

「ちょっと落ち着きを無くしただけですわ」

そう言って目元だけで妖しく笑い、誘い込むような視線を浴びせてきた為、ちよつとばかり心が揺れた。成る程やはり、美女のその表情は男の理性を崩しにかかるようだ。崩れるような俺じゃないけど。

と　　いうよりも、さてはて、どうしたものか。とりあえず面白そうな人達がいっぱい居る場所つてのは分かったし、じゃあここに住んじゃおうつて思ってる俺が居るのも把握している。

が、どこに住む。人里には住みたくない。お断りだ。人里つて所に行ったらもう二度と旅というかそんな感じの事は出来ないらしい……妖怪を倒せる能力があればオーケーらしいが。

……霊力やら魔力やら人間が持てる力は俺に無いらしい。それは巫女さんに言われた。霊夢さんに最初聞いたら諦めなさいってバツサリ切られた。

じゃあ、諦めるか？　まさか、笑える。諦めるなんてそんな事をするつもりはない。

「　　紫さん、能力を知りたいんですけど」

「　　あら、能力持ちの外来人なんてそうそう生まれないわよ？」

「　　知ってます　　そんな事は知ってますとも」

「……そう、ね。貴方みたいな方が安全に人里で暮らしていたら、私としても貴方としてもつまらないわよねえ」

言って、扇子の中の表情が笑ったのが分かった。それはもう魅力

的に。

だから、魅せるように笑ってやった。

「霊夢、この方を死なない程度まで痛めつけてくれる?」「は?」「え?」

「おい紫さん。僕は貴方を怒らせたかなー。おい。何ソレ、どんな虐めだよ。泣いちゃうぜ俺。」

「死にそうになった時に能力が発現する　楽しみだと思わない?」

そして　また妖艶に笑う紫さんでした。

突如背後に受けた凄まじい一撃で、この日何度目か分からないが天地が反転、肩から地面に落ちそのまま五、六回バウンドし、止まる。が、視界にハンドボール級の球が見えた瞬間、自分の意思で体を横に投げ出した。風を切るような音と威圧を出しながら、その球は地面に弾ける。

起き上がると同時に、空中に居る霊夢さんを囲うように周っている。足の筋肉は悲鳴を上げ、捻った足首はずきずきと痛みだし、呼吸をする毎に砂が肺に紛れ込む。正に　地獄。一切合財抵抗の出来ない俺は、こうして逃げる事しか出来ない。

「ギブアップって言えば終わるのよー」

空中からの声。ギブアップなんて出来る訳がない。そう思っていると、目の前に弾。これは避けられない。腕をクロスし弾を受ける。慣れない衝撃に体は吹き飛び、両足は地面から浮く。輝く太陽を視界に入れた瞬間、背中から地面に落ち頭を強打してしまう。まず

った。
何とか、何とか頭に着弾しないようにしてきたというのに。地面に強打してしまえば終わりじゃないか。

「あら　頭打ったみたいね。もう終わりでいいんじゃない？　疲れたし」

そんな声が聞こえた。なめやがって　なめやがってッ！

くらくらする頭を持ち上げ、頭を振る。後一回でも頭を強打すれば　死ぬかもしれない。が、それがどうした。それが　何だというのだ。俺は元々死を望んでいた。それを生かされ、生きる事にした。だからここで死んだとしても　俺は別に後悔も反省もしなくていい。

さあて　足掻かせる。

「なめてんじゃねえよ　糞巫女が」

言った　瞬間、目の前が真っ白になった。同時に正面から衝撃を受け、けれど今度は前みたいな生半可なものじゃなく　気が付いたら仰向けになっていた。何が起きたのか理解できない。立ち上がろうとして　何が起ころうか確認しようとして　体が動かない事に気が付いた。

そして数秒経ち、全身がもやもやとしているのに気がつく。全身が胸焼けしているような錯覚。次の瞬間　俺は血を吐いた。これまで十六年間生きてきて、俺は初めて血を吐いた。仰向けの状態で

血など吐けるのか　これは、きつつい。早く起き上がらないと俺は血を飲み込んでしまう。それは危険だ。死ぬかもしれない。

死ぬかも　知れない？

ああ　結局俺はここで生きたいって事か。結局、俺の心はここを望んでいるって訳か。なら　いい。もう　いい。

この世界で楽しく生きる為　俺はここで倒れる訳にはいかない。人に眠る潜在能力という名の能力は　まだこの程度じゃ開花してくれない。

「限界を　決めるな。進化に　壁を造るな」

呟く。

「自分を　否定するな。夢から　逃げるな」

呟く。

「男なら　」

呟く。

「　諦めてんじゃねえッ！」

そして　ゆっくりとした動作で、俺は体を起こす。目を見開く。霊夢さんと、縁側で意地悪く笑った紫さんが見えた。次の体を立たせて、俺は自然の動作で右手を突き出す。

変化させる。

「『変化させる程度の能力』　ね」

紫さんが呟いた。成る程。そうか。

霊夢さんの足を木の棒に　変化させる。

「……………何も起きないわよ？」

朦朧とした意識でそんな言葉が聞こえた。おいおい勘弁してくれ
人には作用しないのか？

けれどまだ倒れない。空中でふわふわしていた霊夢さんが地面に
降りてくる。もう弾を撃つ気はないらしい。

霊夢さんの周りの空気を、強烈な睡眠毒に。

「……………？　何も起きないわよ？」

……………。

……………それは、アンタが規格外だからですよ、霊夢さん。

口は開けなかった。声帯も動かなかった。薄れゆく意識のなか
霊夢さんがかくんとふらつくのが見えただけ　満足だった。

「あ……………眠い」

生活下準備？（前書き）

魔理沙さん登場回。わーパチパチ。

生活下準備？

驚く程すつきりと意識が覚めたなあなんて思いながら目を開けると、知らない人がこつちを見てた。……あれ、メイドさん？ その手に持った筈は……何だろ？ つか帽子が尖ってやがる。

何か 魔法使いみたいな、印象だ。いやしかしここには魔法使いも居るんだけっか？ んじゃあこの人魔法使いなのか？ 分からん。

「……そんなに見つめられると照れるんだぜ」

「こりゃ失礼」

とりあえず視線を外して、起き上がろうと試みてみた。けどノーパワー。霊夢さんにフルボッコされて起き上がる力も失ったよう……ああ、そうだ。何か変な能力あるんだった。

だから体を普通の状態に変えようとしてみたが 出来ない。霊夢さんに使用できなかったからもしかやと思っていたが、成る程つまり人体には使用出来ないのか。

「あの」

「ん？」

「名前お聞きしても宜しいですか？」

「ああいいぜ、自己紹介がまだだったな。霧雨魔理沙っていうんだ！ よろしくな！」

霧雨魔理沙……魔理沙さんか。黒と白が基調の……俗に言うメイド服を着こなして、これまた黒白のトンがり帽子、腰くらいまである長い金髪。オーケー覚えた。

「お前は何て言うんだ？ 私だけ自己紹介してお前はしないっていうのは何か居心地悪い」

「あー……そういうえば紫さんと霊夢さんにも自己紹介してなかったな」

「……変な奴だぜ」

「まったくです」

そう言うと魔理沙さんはくつと笑って、立ち上がる。ふわりと金髪がなびいた。紫さんとは違う意味で魅力的だ。これまた惚れそうだ。これで惚れたら三人に惚れた事になるから止めてほしい。どうしてここの人達はこうも魅力的なのか俺には理解できん。

「霊夢と紫連れてくるぜ」

「いってらっさい」

………そういうえば霊夢さんあの後どうなったんだろ。象くらいなら軽く眠らせる量の睡眠薬だったのに、まるで気にしていなかった。不死身なんだろうか。……意外にありえそうで怖かった。

程なくして、目の前に空間が開く。いや、隙間と言った方が正しいか。おびただしい量の眼球がその空間には埋め尽くされている。そっぴや怖がらなかつた外来人は俺が初だとか言ってた。怖いというより不気味なだけだな。

「起きたのね」

「一々隙間使わないで襖開けて入ってきてくださいよ」

そう言って襖を指差そうとしたが、力が一切入らなかった。非常にまずいような気がしてならない。これ二度と力が入りませんとか言われたら舌嚙んで自殺しよう。出来ないと思うからやっぱり泣こう。

そんな事思ってたなら静かに襖が開けられ、霊夢さんと魔理沙さんが入ってくる。

「ああやって入ってきてくださいよ」

「あら、そうすれば貴方を落せるかしら？」

「いやいやもう落されてますから安心してくださいよ。ちゃんと惚れましたから」

「そう言って惚れてる人は居ないのだけれどね」

「そうですかね」

というかまた紫さんの口調が最初と同じようになっている。まあこっちの方が合ってるといえば合ってるんだけど、せつかく崩したのもつたいたい事をした。あ、でもこっちの方が良いって思ったのは俺か。ならいいや。

「で………良い雰囲気になってる所申し訳ないけど貴方の名前聞いてもいいわよね？」

呆れた表情で霊夢さんはそう言ってくる。ていうか何で霊夢さんの巫女服は露出が多いのだろうか。謎である。謎は謎のままが良いと聞くが俺としては謎は怖いんだけど。どうでもいいか。

ただ脇が見えるというのはまずい気がする。脇巫女と誰かに命名されてるんじゃないか。

「ちょっと、聞いてる?」

「ああはいはい、名前でしたね名前」

名前を言おうとして、言葉に詰まった。

……。

「名前、思い出せないんですけど」

「くっ。くくくっ……お前やっぱ変だぜ」

といいながら腹を抱えて笑い出す魔理沙さんと、何となく予想していたみたいな表情の二人。でも呆れが混じってますよー、呆れは隠すものでしょう。

はてさて……しかし、名前。何だっけか。そういえば名前を最後に名乗ったのはいつだったっけ? それすらも思い出す事が出来ない。そもそも俺に名前など有っただろうか? そういうものを一切与えられず、人として生きる事を止めさせられたから 俺は死を望んだんじゃないか?

「 すいません、ちょっと思い出したので一人にさせてくれませんかね」

吐きなれた嘘を、俺は吐いた。

……一体、どの位の間泣いたのだろうか。力を振り絞って布団にもぐり、声を押し殺し嗚咽を押し殺して泣いたのだから外に洩れては居ないだろう。今になって、どうして泣いたのかも分からなくなってくる。

ただ　この人達の優しさに触れて前の世界の事が溢れ出てきたのだというのは何となく分かる。本当に　この人達は規格外だ。見知らぬ人間にどうしてここまで優しく出来るんだろうか。見知らぬ人間にどうしてここまで気遣いが出来るんだろうか。見知らぬ人間にどうしてここまで親切なんだろうか　お陰で泣かされた。

「ああ。起きるか」

そろそろ復活しないとなあ。目が赤くなってたら困るけど、まあそこはのらりくらりとかわそうかな。大分力の戻った腕で布団をばふっと押し上げた。

「ん、おはようませ」

「……いつから居た？」

「最初からだぜ」

襖の奥から見えるのは夕日だった。泣き出したのが昼だから、三

時間位泣いたり葛藤したりしてたのか。ていうか最初から居たって……紫さんの仕業だろう絶対。

「一人にしてくれって 言ったんだけどなあ」

諦めたように動ける手を使っておどけてみせる。魔理沙さんにはかっと思ろく笑って

「一人は寂しいんだぜ」

そう言ってみせた。魅せた。畜生良い笑顔だった。どうしてこうも 魅力的なんだよ。また涙が出そうになって、歯を食いしばって耐える。さすがにここで泣く訳にはいかないだろう。プライドは、あるんだ。

「 どうも、ありがとうございます」

「 いやいいって、今度盗ませてもらうから」

「 前言撤回してもいいですか?」

「 それは認めないぜ!」

認められないみたいだった。

「 さて、と。それじゃあそろそろ起きますかね」

「 おっ。三日ぶりの起床だな!」

「 ……今なんていいました?」

「三日ぶり」

「……そんなに寝てましたか俺？」

「ぐっすり眠ってたぜ！」

「何か悪戯されてませんよね？」

「ん？ 紫が朝お前の部屋から出てくる所なら見たけど？」

「……いや、さすがに、ありえないだろ、それは。何もされてないよな……」

「ちょっと不安だ。何かされてたら慰謝料払ってもらおう。」

「まっ、妖しい事はされてないんじゃないか？」

「……怪しいの間違いだと思いますけどね、いや、どっちでもいいのかな」

「難しいぜ」

「難しいですね」

軽口を叩きながら立ち上がり、膝から崩れそうになったのに驚きながら耐える。こんな体験は栄養失調で倒れたとき以来だ。両親に土下座して野菜を大量に貰ったのを思いだす。生人参は中々に美味かった気がするな。

こんな風に思えるって事は、どうやらもうここに慣れたみたいだ

った。俗にいう異常慣れとか現実逃避とかが関係しているんだろうか。

「肩、貸すぜ？」

「いやいいです、危うく襲いそうになっちゃうので」

「襲ったら殺すぜ」

「責任は取りますとも」

そう言ったら顔を紅潮させはじめる魔理沙さんが居た。いや、責任ってそういう意味じゃないからね、死ぬっていう責任の方だからね？ とは敢えて言わない。言ったら殺されそうな気が間違いない。

「行きますよ？」

「え……あ、ああ」

マジで誤解は止めてほしい。襖を開けると橙色の影が出来ていた。背後の夕日が原因なんだろう、幻想郷という名の通り、幻想的だった。フローリングなのか知らないがとりあえずそれっぽいや床の縁側を魔理沙さん先導で歩き、僕はついていく。途中魔理沙さんが振り返るのは足元のおぼつかない俺に対する気遣いか……情けない。

ある襖の前で魔理沙さんは止まる。開けて中に入ると夕食の準備をしていた霊夢さんが居た。得意なのだろうかと考えて、愚問なのだろう。

「魔理沙、丁度いいから手伝って。アンタは座ってて」

とてとてと走っていく魔理沙さんの後ろ姿を見ながら、胡坐をかいて座る。畳の香りが匂ってきた。何だか初めて嗅いだような気がするのは気のせいだと信じたい。

「……………霊夢さん」

「何？ 今忙しいから後にしてくれない？」

「一時の間でいいので ここに住ませてくれませんか？ 家事も出来ますし、言われたら何だってやるつもりです」

一切の感情を込めずに言ってみた。

「はあ……………あの隙間妖怪に住ませてあげてって頼まれたわよ。それを知った上で言ってるでしょ」

「予想した上でですけどね」

「まっ、変な事さえしなればその能力も有るし一生住ませてあげてもいいんだけど？」

「ありがたいんですけど、それじゃつまらないので」

「……………言うと思ってたわ」

「予想してましたね」

そうして博霊神社で生活する事が決まったのである。

生活下準備？（後書き）

なに後悔はしていないさ。更新は早めにするつもり。

魔理沙さんに誘拐されました？

ほら見る、こんな近くに星があるぜ！ 滅茶苦茶輝いてるぜ！
あっはっはっ。

「何でこうなった」

「誘拐したんだぜ！」

「人はそれを拉致という」

魔理沙さんに誘拐　もとい拉致されました。そうです拉致され
たんです。もうこれしか思う事がありません。箒に跨ってひいひい
言いながら小柄な少女にしがみ付いている今の状態を、果たして前
までの自分は許せるのだから……。

見る！ 月が欠けてる！ これは異常事態だ！ 三日月なだけで
すけど。

「で……俺はこれからどこに行くんでしょうか？」

「魔法の森だぜ」

「どっして行くんですか？」

「ぞつよ……手伝いしてもらいたいんだぜっ！」

「今雑用って言おうとしたな！ 霊夢さんに頼んで撃ち落してやる
！」

「な、それだけは勘弁してくれ！ 真赤になって落ちちゃっせ！」

「赤い……紅い彗星ですね、分かります」

「何だそれ」

「いえ何でも。てか確か紫さんの話だと魔法の森って毒ありまくりじゃなかったですか？」

「能力使えばいいと思うぜ。あるんだろ、能力？」

「はいです」

言いながら、自分の周りの空気を毒を弾く様に『変化』させる。見た目的には何も変わっていないが、魔法の森に行けば分かるだろう。いや、毒って見えるのか……？ ていうかキノコの胞子とかじゃなかったっけか。

……松茸一回でも良いから食いたかったな。いや、でも紫さんに頼めば大丈夫かな。その代わり何を要求されるのか分かったもんじやないけど。

「さてえと、それじゃ魔法の森に到着だぜ」

「迷宮みたいですね」

「迷いの竹林程じゃないと思うぜ？」

「ゲームのダンジョンみたいですね」

「……？」

「小首を傾げた魔理沙さんも中々良いですね、カメラを持っていなかった事が非常に悔やまれて仕方が無い。……おーけー、分かった、謝るからその手にもったカードを下げるんだ。非常にヤバイ事になりそうで困る」

「この寛大な心に免じて許してやるぜ」

「そして雑用が増えるんですね、分かります」

「な、何故バレた！」 「ちよつとは遠慮しろや」

「……その位砕けた口調出来るなら、さん付けしない方がいいと思っ
うぜ？」

「俺がさん付けを止めた時は俺のキャラが崩壊する時です。俺のキャラが崩壊する時は俺が死ぬ時です。ていうか俺がキレちゃったみたいなの時だけです。てか何その引いた目は、おいこら」

「元々変人だと思っていたがこれ程とはっ……」

「潰すぞ魔法使い」

軽口を叩きながら、魔法の森の入り口らしい所に降りる。篋から弾けるように飛びのき、すっと息を吸う。大丈夫だ、体は動く。毒は先程の変化でちゃんと来なくなっているようだ。

周りを見渡すが辺りは闇ばかり。夜なのだから当然か。だが一応という事もあるので、手のひらの周りにある空気を明かりへと変化させる。当然出来た。余りにもチートすぎる気がする。

「おお、灯りだ」

「一応です」

しかし霊夢さんに生活すると告げたその日に拉致される事になるとは思っていなかった。目が覚めると空なのだから驚き。そういえば余りにも寒かったから服を防寒に変えたんだっけ。今の季節は秋だろうか……外の世界と時間軸がずれて居ないのか。

「あ、あと妖怪出ることあるから気をつけるよー」

「……魔理沙さんに任せたいんですけど」

「何言ってるんだ私は乙女だぜ」

「どこの世界にこんな人間らしからぬ乙女が居るのでしょう。霊夢さんに聞きましたよ、どれだけ貴女が恐ろしいか。ああ僕はそんな魔女に連れ去られた哀れな子羊。よよよ……」

「きもっ」「すみません調子乗りすぎました」

……しかし、妖怪か。一体どんな妖怪だろうか。興味が湧いてくる。

いや、どんな妖怪という事もないのか。事実、紫さんのような妖怪も居る。偏見は恐ろしく、油断を誘う。

「それじゃあ……行きましようか」

「おうっ、魔理沙さんに任せとけ！」

俺は、正直なめていたのだと思う。

生物が 死ぬという事に。

なめていたのだと思う。

魔理沙さんが自らに襲い掛かる妖怪を殺すのは当たり前の事だ。

その当たり前の事を目にして 俺は後悔した。生物なのだから血と同じような液体も出るだろう。そして同時に手足と思われる部分は玩具のようにひしゃげ、顔面は豆腐のように粉碎され、半身は面白おかしく吹き飛ばす。

当たり前 そう、当たり前なのだ。やらなければ死ぬという時点で、相手を殺すのはもはや必然。当たり前。

結局俺は甘かった。楽観的だった。楽観的すぎた。軽く捉えていた。

生き物は、死ぬ。

終わらないものは無い。

いつ終わるかは分からない。

でもいつかは終わるのだ。

「おい、大丈夫か？」

軽やかな笑みを浮かべて、魔理沙さんは近づいてきた。

だから、ぎこちない笑みを浮かべて、俺は口を開く。

「はい、大丈夫です」

口から出たのは　吐きなれた嘘だった。

でもバレなければ嘘は真にすり替わる。この嘘も結局、真に変わる。

「嘘だろ」

魔理沙さんは断言する。金色の混じったその瞳を少し細めて、確信をもった音色で断言する。

嘘は嘘で終わった。

思わず、唾を飲み込んだ。辺りは暗い。風が揺らす木の葉の音しか聞こえない。ひらりと、風にまって葉は落ちた。

手のひらから漏れた僅かな光は、魔理沙さんの悲しそうな表情を一瞬だけ映した。

けれど、俺の喉は震えない。大気を揺らす「嘘じゃないです」という言の葉は、落ちてはこない。

「バレちゃいましたか」

代わりに、清しい程の音色で俺の言葉は落ちた。暗闇に溶けるように消える音。その余韻全てを聞き入るようにながら、魔理沙さんは目を閉じた。

そして、辺りが静まり返った時、魔理沙さんは目を開ける。

「私を誰だと思ってるんだ　普通の魔法使い、霧雨魔理沙さんだぜ」

晴れやかな笑みと共に魔理沙さんは告げる。

嘘。

「この俺を前にして嘘を表すなんて、愚か過ぎて言葉も出ません」

「何、言ってるんだよ。私が嘘なんて吐くはずないぜ」

嘘。

「それじゃあその悲しそうな瞳をどうかしてください」

「……おかしいぜ、お前」

嘘。

「大丈夫ですよ、別に俺は魔理沙さんを変な目で見るともりはありません」

「だから、だから何言って」

「俺が甘いだけだったっつってんだよッ！ お前が妖怪を殺すのは

俺の為だったんだろっがッ！ それを恐怖しちまった俺が悪いって
そう言っただよッ！ お前まだ俺と歳ほとんど変わらねえだ
ろっがッ！ 見かけ相応なんだろっがッ！ もっと 頼ってくれ
よー！

俺は。

「悔しいんだよおっ！」

この少女に何もかも押し付けて
妖怪を殺すという事も押し付けて
拳句の果てには生物を殺す少女に恐怖して

押し付けられた少女は何も言わず
俺を守る為に少女は妖怪を殺す業を背負い
俺に恐怖されても俺を気遣い

俺は

「無理は、するもんじゃないぜ」

「貴女に言えた台詞じゃないでしょ」

「そいつは酷いぜ」

「なら泣くのを止めてみるよ」

「……意地悪だぜ」

「ほらお兄ちゃんが胸貸してやるよ」

「お前十六歳だろ？ 私は十七だぜ」

「お前は女で俺は男だろっ」

「よく言っぜ」

「ほら吹きなもんで」

幸せに生活できるよう、強くならないといけない。

魔理沙さんに誘拐されました？（後書き）

作者の東方知識はここに載っている小説様を拝見させて頂いた程度です。

魔理沙さんの口調は書き辛い。ただ性格は女の子なんだからあんなだろうと思う。強がりなんだぜ魔理沙ちゃん！ ってか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6837y/>

東方娛樂記

2011年11月21日23時13分発行